

令和3年度 オーストラリア・クィーンズランド工科大学研修 《研修レポート》

大阪府とクィーンズランド州は1988年の友好提携以来、青少年や教育分野などにおいて交流を行ってきました。その一環として、2005年から府立学校の英語科教諭を対象に、クィーンズランド大学が実施する英語指導法研修への参加プログラムを行って参りました。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、クィーンズランド工科大学が提供するオンライン形式での英語指導法研修のプログラムを実施いたしました。大阪府からは3名の教諭にご参加いただきましたので、その研修報告の一部を抜粋・要約してご紹介いたします。

《令和3年度実施内容》

研修期間：令和3年7月26日（月）～7月27日（火）

午前授業：9:00～11:30 午後授業：12:30～15:00

研修内容：外国語として英語を教える教員のための英語指導法

形式：オンライン（ZOOM）

研修先：クィーンズランド工科大学QUT College (English pathway programs) とthe School of Teacher Education and Leadership

参加者：府立学校英語科教諭 3名

費用：* 研修費についてはクィーンズランド州が負担。（研修費には授業料、教材費を含む。）
* 昼食代、オンライン接続にかかる通信費等は参加者負担。

研修までの流れ：

（5月）府立学校へ周知・募集 → （6月）選考（作文） → （7月）研修当日

（以下、参加者の研修報告書より抜粋・要約）

■ 研修内容

- ・1日目午前：第二言語教育と学習についての理論と実践
言語学習における異文化理解の重要性と、授業内での指導方法
- ・1日目午後：客員講師による講義 – ポップカルチャーとの関わりを通して異文化理解を深める –
 - ・オーストラリアの言語教育について
 - ・授業内で生徒たちの発言や反応を促す方法
- ・2日目午前：第二言語教育と学習についての理論と実践
 - ・マインドセット
 - ・褒めることの効果
- ・2日目午後：第二言語カリキュラム編成
 - ・フィードバックの重要性
 - ・ライティングやプレゼンテーションの際の評価の意義と評価方法

■ 研修から学んだこと

《異文化理解について》

- 言語を学ぶことと、その言語を話す国の文化を学ぶことはセットであるべきである。文化を知ることにより、その国の言語の本質なども学ぶことができるからだ。加えて、他国の文化を学ぶことは、自国の文化を再認識するきっかけにもなる。
- 「文化とは何か」を確認するところからスタートした。氷山を例に挙げ、水面から見えている部分が映画、商品、美術、音楽や食べ物などいわゆる文化そのもので、それらにはその国特有の物の考え方や見方、規範、価値観などが背景にある。後者が氷山の水面下にあたる。お互いの文化を理解するということは、まず自国の文化を知り、相手の文化を知る。次に2つの文化の類似点や相違点を見つける。そうすることで、どちらの文化が正しい、正しくないという判断をしなくなったり、お互いの文化を尊重したり、文化をもっと知るために他の言語に興味を持つなど、相互間の文化理解につながる。気づく→比較する→振り返る→交流するという過程を踏みながら理解は深まっていく。
- リーディングの授業でも海外との比較を交えながら授業を進めることができればリーディングを通して外国に対する理解を深めることができる。また、そもそも「文化とは何か」という内容もぜひ生徒に伝えたい内容であると感じた。

《オーストラリアの言語教育について》

- 文化と言語は切り離せないもの(“inseparable”)として、言語教育のカリキュラムの中に「異文化理解 (“intercultural understanding”）」が組み込まれている。

オーストラリアの言語教育のカリキュラムにおいては生徒が以下の

- ①communicate in the target language
- ②understand language, culture and learning and their relationship, and thereby develop an intercultural capability in communication
- ③understand themselves as communicators

能力を身につけることを狙いとしており、言語運用能力そのものと同じ程度かあるいはそれ以上に「異文化理解」、多様性の理解、そして自分とは「違うもの」に対する寛容性を身につけることに重きが置かれている印象を受けた。

《言語学習をする目的について》

- 言語を学ぶことで、世界の言語的・文化的な多様性と関わりあう機会を得ることができ、「自分とは違う」ものへの受容力を高めることにつながる。それにより、社会生活の様々な側面についても理解できるようになる。

《ポップカルチャーを取り入れることのメリットについて》

- 日本の学生たちにとって英語は学校で教科として勉強するもので、英語という言葉や英語を日常語として使用する人たちはある意味「遠い存在」(リアルではない)と感じているように思う。そのような生徒たちに対してポップカルチャーを取り入れた授業を行うことは英語を「生きた言葉」として捉え、自分たちと変わらない人(自分たちと同じような高校生)が生きる「英語を話す文化」をより身近に感じるきっかけになると思った。そのことで学習意欲が高まることも期待できるのではないか。
- 講義内では7分ほどのオーストラリアのTVアニメシリーズを視聴した。短い動画の中でも文化の違いなどが見受けられ、興味深かった。このような違いを生徒たちで見つけさせ、その理由は何かまで授業で掘り下げることができれば、異文化理解が深まるのはもちろんのこと、日常生活でも多角的な視野で物事をとらえることができるのではないか。

《学んだマインドセットについて》

- growth mindset : 「自分の成長は、経験や努力によって向上できる」という考え方
growth mindsetを育てるためには、褒め方が重要なポイントとなっている。生徒がなにが課題を達成したときや、素晴らしい成績をとったとき、生徒の知能や能力をほめるのではなく、その生徒が行った過程や努力を誉めることが大切。成功は氷山の一角に過ぎず、その成功に至るまでには、見えない努力や失敗、粘り強さなどがあったということを頭に入れたうえで褒めることで、生徒たちは、自分自身により自信を持ち、成長することができる。

《評価方法について》

- フィードバックは、生徒たちの改善すべき部分をサポートするための、意味のある情報を与えることができ、彼らのやる気を促進させることができる。また、課題が完成してからフィードバックをおこなうより、早い段階で行うほうが、フィードバックをより効果的なものにする事ができる。

■ 今後に向けて

- 今後は授業で扱っている教材に関連させながら、異文化理解の機会も作ろうと思います。
- メソッドや授業活動例はすぐにでも取り入れたいと思っているところだが、何よりも文化の一側面としての言葉(英語)ということをお忘れずにいたいと思う。
- オーストラリアでの、異文化理解や多様性の理解、他者への寛容を掲げた言語教育のはびのびしていても素敵だと思った。
- 個人的に感じたのは、「子育ての目標 = 自立」という考えが根付いていて、学習においても同じことが言え、independent learnerを育てるためには？という視点で様々な活動もしくは評価、助言が行われているように思う。「independent learnerを育てる」という視点での評価や助言をするということが私には欠けていたので今後はこのことを軸に考えることで、より生徒主導の活動が多い授業を作り上げていきたい。
- 2日間のプログラムは、これまでの自分の授業や生徒とのかわり方を考え直し、改善させることができる、非常にいい機会でした。

※来年度も本事業を行う場合は令和4年4月頃にお知らせする予定です。参加については是非ご検討下さい。

《問い合わせ先》

〒559-8555 大阪市住之江区南港北1-14-16 大阪府咲洲庁舎37階
大阪府府民文化部都市魅力創造局国際課 (オーストラリア・クィーンズランド州担当)
TEL : 06-6210-9310 FAX:06-6210-9316